

小学校外国語教育を通して自己調整学習者を育てる条件の検討

－小学校教員養成課程の学生が抱く外国語の家庭学習に関する必要感－

Examination of Conditions for Fostering Self-Regulated Learners
Through Foreign Language Education in Elementary Schools:
Necessity of Home Study of Foreign Languages
Among Students in the Elementary School Teacher Training Course

田山 享子¹⁾
Kyoko TAYAMA

概要

本研究では、(1) 外国語の家庭学習を導入することが児童の自己調整学習方略の獲得につながるのか、(2) 外国語の家庭学習を遂行するにはどんな教育的介入が必要か、について外国語教育に携わる指導者の視点から明らかにする。Zimmerman (1989) による自己調整学習方略、および山下 (2020) による課題遂行に必要な教育的介入の視点をもとに質問文を作成し、小学校教員養成課程の104名の学生から回答を得た。因子分析の結果、指導者が児童に期待する自己調整学習方略は3因子に収束した。また、指導者が課題遂行時に必要だと考える教育的介入も3因子に収束された。これにより、外国語の家庭学習に期待する効果と、家庭学習を遂行するために必要な指導条件が可視化された。

キーワード：小学校外国語教育，自己調整学習，家庭学習，小学校教員養成課程，必要感，教育的介入

Abstract

The purpose of this study is to clarify from the perspective of student-teachers enrolled in elementary school teacher training courses whether (1) introducing home learning in conjunction with foreign language classes leads to the acquisition of self-regulated learning strategies in children, and (2) the kind of educational intervention necessary to carry out home learning of foreign languages. 104 participants answered a questionnaire based on the self-regulating learning strategies by Zimmerman (1989) and the educational intervention necessary for the task by Yamashita (2020). The results of the factor analysis showed that the self-regulated learning strategies that instructors expected from their students converged on three factors. The educational interventions that the instructors considered necessary when carrying out the tasks also conformed to the three factors. This allowed us to visualize the expected effects of home learning of a foreign language and the teaching conditions necessary to carry out home learning.

Keywords : Elementary school foreign language education, Self-regulated learning, Home study, Elementary school teacher training course, Sense of necessity, Pedagogical interventions

¹⁾ 共栄大学 教育学部

1. はじめに

「教科」外国語では、教科用図書を主教材とし、デジタル教材やタブレット端末等のICT機器の充実が図られ、豊富な言語材料のもとで授業が展開されている。一方で、教科の学習到達目標として、週2単位時間の中で学習内容の習得が求められている。語彙や表現の練習が不十分なまま自己表現活動に移行せざるを得ない状況等による、外国語学習を苦痛に感じる児童の存在が懸念される。これまで、英語が使える日本人の育成は大きな課題であり続けてきた(文部科学省, 2011)。英語に苦手意識をもつ学習者を対象としたリメディアル教育の研究からも、英語が使えるようになりたい願望をもつ学習者が多いことが報告されている。このような現状を踏まえ、小学校外国語の教科化で生じた課題は何か、小学校段階から導入できる施策はあるのか、これらを模索することが本研究の根幹にある。

これまでの第二言語習得研究や学習心理学研究からの示唆と、小学校外国語教育の歩みを振り返り、今後目指すべき視点として、次の2点が重要だと捉えた。1つ目は、学習の成果を確実にする点である。野口(1986)が「児童が自分自身を鍛えて伸ばすすばらしさを自覚させる授業こそが生涯教育の素地が養われる。」と述べているように、指導者は授業に全力を注ぎ、授業内で児童をしっかり鍛え、学力獲得の保障を目指さなければならない。一方で、繰り返しの学習機会の確保、学習習慣形成のために広く実践されている「宿題」等、授業外の学習の効果も否定できない。2つ目は、指導者の直接的指導を離れても自律的に学ぶことができる学習者を育成する点である。教育課程に基づく外国語教育と併せて、学習者が進路選択や仕事上の必要に応じて取り組む外国語学習もある。このような場合、学習者の自律性や学習動機の維持、自分自身のマネジメントが重要となる。これらの課題に迫るために、Zimmerman(1989)らが提唱した『自己調整学習サイクル』に注目した。『自己調整学習サイクル』とは、「予見」、「遂行コントロール」、「自己省察」の3つの段階を循環させながら学習に取り組むことを通して自己調整学習者を育成するものである。授業内において、この段階を踏んだ学習活動を展開できることが理想であるが、授業中に学習者に理解度を自覚させたり、それに応じて学習方法の改善策を思考させたりする時間を確保することは難しい。授業と連携した外国語の家庭学習を導入すれば、児童一人一人が必要とする時間を充てて学習内容を振り返ったり、音声で触れた表現や語彙を文字とともに視覚的に確認したりするなど、思考を働かせながら知識を整理する機会を設けることができる。とはいえ、自宅で児童に一任するだけの学習では効果は期待できない。指導者による教育的介入を行う学習としてとらえ、授業を補充するものとして扱うことが必要だろう。

本研究では、外国語における家庭学習の在り方を自己調整学習者を育てる視点から模索するとともに、家庭学習の実現可能性と指導者に求められる学習者への支援策を明らかにする。そのためには、指導者の家庭学習に対する必要感や児童の自己調整学習方略の獲得に対する期待感を捉えておくことが必須である。本研究では、教育実習の履修条件となっている小学校外国語教育に関する2科目を履修済みである学生は、小学校外国語の指導者に求められる理論と実践に関する知識をおおよそ習得できていると捉え、指導者としての立場で意見を聞く。小学校外国語教育においてこれまで明確にされなかった、自己調整学習者を育てるといふ視点からの児童の支援策を明らかにし、筆者の今後の研究となる「外国語の家庭学習教材」と『自己調整学習サイクル』に基づく授業と家庭学習の連携案の作成へとつないでいく。

2. 先行研究

2.1 「自己調整学習」が求められる背景

平成29年告示の小学校学習指導要領第1章総則2(1)に、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際、

児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮すること。」とあり、学校教育全体および各教科等の指導を通してこれらの実現を図ることが記されている。また、中央教育審議会の答申をまとめた「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」の「個別最適な学び」についての解説では、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」が必要であることが述べられている。子供一人一人が課題解決に主体的に取り組む、かつ子供自身が学習方略を工夫したり改善したりして自分自身の学習を調整できるようにするということは、Zimmerman (1989) が提唱した、メタ認知、動機づけ、行動において、自らの学習過程に能動的に関与して進められる学習である自己調整学習の考え方に通じる。小学校外国語においても、授業や家庭学習を通して自己調整学習を児童に意識させるような学習機会を提供することは、生涯にわたって自ら外国語を学び続ける学習者を育成することの基盤となり得る。

2.2 『自己調整学習サイクル』に基づく実践と課題

主体的に学習に取り組む態度が備わっており、児童の学習習慣が確立している状態とは具体的にどんな状態と捉えればよいのか。学習指導を行う指導者が具体的に捉えることができるような視点が必要である。

米崎・伊東 (2010) は、フィンランドでは小学校の時点からすべての教科で自律学習が強調されていることを報告している。さらに、自律学習者とは「学習プログラムの目的を理解し、自分の学習責任を明確に受け入れ、学習目標を設定し、計画ならびに活動を率先して行い、規則的に学習を振り返り、その効果を評価することができる学習者」と定義している。自己調整学習は、多くの研究者による多様な理論が見られるが、本研究では、Zimmerman (1989) が提唱した『自己調整学習サイクル』3段階（「予見」、「遂行コントロール」、「自己省察」）に注目する。

日本の教育現場でも『自己調整学習サイクル』に基づく実践や研究は、これまでもなされてきた。牧野 (2014) は、英語習熟度が低い大学生のリメディアル教育に、『自己調整学習サイクル』の3段階を4サイクルにして授業で試みた結果、学生の目標達成度や授業理解度の自己評価スコア、自己効力感スコアが有意に向上したことを報告している。山本・齋藤・近藤・石川 (2013) は、小学校高学年で自己調整学習能力育成モデルに沿った外国語活動の授業を行うことを通じて児童に自己調整学習を意識させ、中学校1年生で自己調整学習を本格的に育成するという試みを行った。結果として、小学生は教師の介入に依存する傾向が高いこと、小学生は毎時間の目標が分かること、つまり「予見の段階」における目標設定活動に意義を見出していることを報告している。関連する研究として山本・齋藤・石川 (2013) は、中学校英語における自律的学習者育成のため、自己調整学習能力 Can-do リストを作成し、教師の指導助言の効果を検証している。その結果、教師の指導助言が生徒の自己調整学習に与える影響は生徒によって異なり、無意識的にスローラーナーとそうでない生徒への指導助言を区別していると報告している。さらに、自己調整学習を促進する指導は、英語学習教授法に留まらず、生活習慣・家庭環境といった生徒の内面まで関わる必要があると述べている。

小学生を対象とした『自己調整学習サイクル』に基づく学習指導の研究は限られており、その効果と課題を児童への指導に生かすところまでは至っていない。山本らのように「予見」と「自己省察」に焦点を当てた研究は見られるものの、「遂行コントロール」段階に焦点を当てた研究はほとんど見られない。授業中の「遂行コントロール」、つまり学習活動進行中の教育的介入は、机間指導等による個別指導が多くなされているが、対応できる人数や時間の面で限界がある。そこで、家庭学習という形で学習の機会を児童に提供することにより、「遂行コントロール」段階への教育的介入の機会をこれまで以上に確保することができるのではないかと考える。

2.3 「宿題」, 「反転学習」から考える「家庭学習」の効果

自宅で学習するものとしては, 「宿題」, 「家庭学習」, 「自主学習」という表現を学校内外でよく聞く。阿久津(2017)は, 宿題の主な役割として①反復練習, ②授業で扱えなかった内容を補う, ③学習習慣の定着の3点を挙げている。さらに, 宿題の量や内容, 頻度は各教師に委ねられており, 個人差が大きく宿題をしない子どもへの考え方にも違いが見られることを指摘している。Cooper(1989)は, 学習者が宿題に費やした時間量と成績について, 50の論文のメタ分析をした結果, 小学生では成績にはほとんど相関関係がなかったことを報告している。また, Bempechat(2004)は, 宿題の有効性をテストの点数および成績のみに焦点を当てるのは短絡的であることを主張している。Bempechatによれば, 宿題は努力の価値や間違い, 難しさに対処する能力や学習に役立つ学習習慣および成績に関する信念の発達に必要な時間と経験を子供に提供するものであり, これらの能力は一晩で発展させることはできないという。これらから, 小学生に課す家庭学習では, 復習や反復練習を通して学習内容の忘却を抑制し, 知識・技能等の習得を促すという目的はもちろん重要であるが, 学ぶ目的や到達目標に向かって見通しをもって学習に取り組むなど, 発達段階に応じた自律的な学習習慣を育成することを指導者が重視することにより, 宿題が形式的, 慣例的なものに終始せず, 学習者を成長させる効果が期待できるといえるだろう。

授業と家庭学習を連携して学習効果を高める方策の一つとして, 「反転学習」がある。佐藤ら(2014)は, 「教育上の効果は, 家庭学習と学校での授業実践の両者が組み合わせられて達成される。」としている。反転学習の実践における授業実践では, 通常の授業と比較した結果, 討議や協働学習を中心とした授業が展開され, 習得事項の比較検討, より発展的な課題に取り組むことができることを報告している。稲垣・佐藤(2015)は, 小学6年生算数において授業の予習としてノート作成課題に取り組みながら家庭でビデオを視聴するという反転学習をした結果, 下位群の児童であっても一定程度の知識の定着が見られたことを報告している。一方で, 学力に課題がある学習者に対して, 家庭学習への遂行支援が必要であると指摘している。

これらの実践や研究から, 指導者として家庭学習を課すのであれば, 全面的にその効果を期待するのは早計であること, 学習者個々の特性に応じた学習指導や支援が必須であることがわかる。

2.4 研究課題

本研究の目的を達成するために, 以下の4つのリサーチクエスチョンを設定した。

RQ1: 小学校教員養成課程の学生は, 外国語教育を通して児童はどのような自己調整学習に関する態度や方略を身に付けると考えているか。

RQ2: 小学校教員養成課程の学生は, 外国語の家庭学習を通して児童はどのような自己調整学習方略を身に付けると考えているか。

RQ3: 小学校教員養成課程の学生は, 外国語の家庭学習の遂行段階では, どのような教育的介入が効果的だと考えているか。

RQ4: 小学校教員養成課程の学生は, 外国語の家庭学習を通して, 『自己調整学習サイクル』のどの段階の方略を児童が身に付けると考えているか。

3. 調査

3.1 参加者

4年制私立大学教育学部2年次の小学校教員養成課程在籍の学生を対象とした。“小学校教員養成課程外国語(英語)コアカリキュラム”(2017)に基づく教育課程による履修をした学生であり, 参加者全員が「初等教科教育法(外国語)」の履修を終了しており, 若干名を除き1年次に「初等外国語」を履修済みである。

3.2 材料

3.2.1 教科外国語における家庭学習教材使用に関する意見を問う調査紙

高学年外国語における家庭学習は、教育課程特例校等を除き現時点ではほとんど実施されていないため、家庭学習の教材として、“小学校6年生用ふり返り学習教材外国語”（文部科学省，2021）を具体例として提示した上で、活用に関する意見を選択肢と自由記述により尋ねた。選択肢では、(1) 指導者の立場と学習者の立場で“小学校6年生用ふり返り学習教材外国語”を使用したいか、(2) 家庭学習は児童が自律的な外国語学習者になるために必要か、(3) 小学校教員としてどんな家庭学習教材を使用したいか、(4) 家庭学習の頻度、(5) 1回あたりの学習時間、(6) 1回あたりの学習量、について尋ねた。(1)の選択肢は以下の表1の通り、指導者と学習者の両方の立場で意見を問うものを設定した。自由記述では、児童が外国語の家庭学習をすとしたらどのような条件が必要か、児童が外国語の家庭学習をすとしたら授業内容とどのように連携をとっていくのがよいか、について尋ねた。回答率は87.2%、有効回答率は89.7%であった。

表1 “小学校第6学年ふり返り学習教材外国語”の使用に関する意見

○1つ	指導者の立場として	学習者の立場として	○1つ	指導者の立場として	学習者の立場として
ア	活用したい	使用したい	コ	どちらともいえない	使用したいとは思わない
イ	活用したい	使用したいとは思わない	サ	どちらともいえない	どちらともいえない
ウ	活用したい	どちらともいえない	シ	どちらともいえない	分からない
エ	活用したい	分からない	ス	分からない	使用したい
オ	活用したいとは思わない	使用したい	セ	分からない	使用したいとは思わない
カ	活用したいとは思わない	使用したいとは思わない	ソ	分からない	どちらともいえない
キ	活用したいとは思わない	どちらともいえない	タ	分からない	分からない
ク	活用したいとは思わない	分からない	チ	その他（ ）	その他（ ）
ケ	どちらともいえない	使用したい			

3.2.2 小学校外国語教育を通して児童を自己調整学習者に育てる条件を探る調査紙

3.2.2.1 外国語学習を通じた児童の自己調整学習能力の向上 (RQ1)

ここでは、山本・齋藤・石川（2013）による、「学習者の自己調整学習能力と教師の指導助言の関係」を調査するために使用された質問文をもとに、高学年児童の授業内外の外国語学習を想定した質問文に改変し、6件法にて回答を求めた。質問文は28あり、表2に示す。

なお、6件法の回答基準は表3の通りであり、以下3.2.2.4まで質問文の回答基準は同様である。

表2 外国語学習を通じた児童の自己調整学習能力向上への指導者の期待

<ol style="list-style-type: none"> 1 外国語の授業では、児童同士が学習の方法を互いに比べて、自分の学習に生かすことができる。 2 外国語の学習は、児童が家庭でもできる限り外国語の学習時間を作ろうとするきっかけになる。 3 児童は、外国語の学習は将来役に立つと思っている。 4 児童は、努力して学習すれば外国語を習得できていると思っている。 5 児童は、外国語の学習に関するまとめのプリントや単語の一覧表など、学習する内容を示してほしいと思っている。 6 児童は、塾や保護者などの助けや強制がないと、学校以外で外国語の学習はできない。 7 児童は、外国語の発表やパフォーマンステストなどの練習を必ずしている。 8 児童が、自宅で自主的に外国語の学習をすることは大切だ。

- 9 児童は、自分に合った外国語の学習方法を工夫したり、調べたりする。
- 10 児童が一人で外国語の学習をする時、自分の学習方法は自分に合っているかどうか振り返ることができる。
- 11 児童は、外国語の宿題を出せば必ずやるようになる。
- 12 児童は、外国語指導者が振り返りカードやワークシートを点検してくれれば、外国語の学習をがんばれると思っている。
- 13 児童は、ゆくゆくは自分一人でも外国語の学習ができるようになりたいと思っている。
- 14 児童は、外国語の宿題を出せば、自分で計画を立てて計画的に学習する。
- 15 児童は、外国語の学習において、どこがわかっていてどこがわかっていないのかをはっきりさせている。
- 16 児童は、外国語の学習は好きというより、仕方がないから学習している。
- 17 児童は、自分は外国語を理解したり運用したりできる力があると思っている。
- 18 児童は、自宅で外国語の学習をしているかどうかを友だちとお互いに確認し合っている。
- 19 児童は、外国語の学習で困っている時には教師に助けてほしいと思っている。
- 20 児童は、外国語の学習で分からない時には友だちや教師に尋ねる。
- 21 児童は、外国語の学習で分からない時にはあきらめずに学習方法を変えてみようとする。
- 22 児童は、英語がすらすら話せたらいいなと思っている。
- 23 児童は、いつか英語で本を読んだり、映画を見たりできるようになりたいと思っている。
- 24 児童は、教科書で学ぶこと以上の英語の知識は必要ないと思っている。
- 25 児童は、自分が目標にしている英語力を将来つけられると思っている。
- 26 児童は、外国語の小テストや定期テストは目標になるのであった方がよいと思っている。
- 27 児童は、外国語の学習についての自分の課題点を教師に指摘してほしいと思っている。
- 28 児童は、宿題などで強制されないと自宅での外国語の学習はできない。

表3 参加者に示した6件法の回答基準

数値	基 準
1	「全くそう思わない」に該当し、質問に対する肯定度（必要感）が0%もしくは0%に近い状態
2	「そう思わない」に該当し、質問に対する肯定度（必要感）が20%程度
3	「あまりそう思わない」に該当し、質問に対する肯定度（必要感）が40%程度
4	「ややそう思う」に該当し、質問に対する肯定度（必要感）が60%程度
5	「そう思う」に該当し、質問に対する肯定度（必要感）が80%程度
6	「とてもそう思う」に該当し、質問に対する肯定度（必要感）が100%もしくは100%に近いもの

3.2.2.2 外国語の家庭学習を通じた児童の自己調整学習方略の獲得 (RQ2)

ここでは、Zimmerman (1989) が提示した、15の自己調整学習方略をもとに、児童が外国語の家庭学習をすることを想定して、指導者の立場で回答するものである。質問文、表4の通りである。

表4 外国語の家庭学習を通じた児童の自己調整学習方略獲得への指導者の期待

- 1 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は主体的に学習の進捗や理解度を確認するようになる。
- 2 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は与えられた教材を工夫して使用するようになる。
- 3 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は目標達成に向けて学習計画を立てることができる。
- 4 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習課題をよりよく遂行するための参考資料や必要な情報を探そうと努力する。
- 5 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習の記録を書いたりできなかったところを一覧表に整理したりする。

- 6 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は自分が学習しやすい環境を構築することができる。
- 7 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は自分の学習結果に対する報酬を設定して、それに向けて努力することができる。
- 8 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習の効果を高めるために、反復練習や学習内容を記憶するための対策などを講じることができる。
- 9 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習で困った時に友だちに支援を求めることができる。
- 10 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習で困った時に教師に支援を求めることができる。
- 11 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習で困った時に保護者や周囲の大人に支援を求めることができる。
- 12 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は復習としてテストやワークシートを見直すことができる。
- 13 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は復習として教科書等のテキストを見直すことができる。
- 14 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は次の授業の準備やテスト対策（パフォーマンステストも含む）などに取り組むことができる。
- 15 外国語の自宅学習教材を使用しても、児童は教師や保護者が言った通りに、漠然と課題に取り組むだけである。

3.2.2.3 外国語の家庭学習の遂行段階において必要な教育的介入（RQ3）

ここでは、山下（2020）による、学習の遂行段階に必要な教育的介入について、メタ認知調整、感情調整、社会的調整、環境調整、報酬の分類をもとに、筆者が22の質問文を作成した。質問文は表5の通りである。

表5 外国語の家庭学習遂行段階において指導者が必要だと考える教育的介入

- 1 難しい課題に直面したら、課題一度に解決しようとするのではなく、授業での学習を思い出しながら少しずつ解決するように助言する。
- 2 難しい課題に直面したら、教科書に印をつけたり自分なりのメモをしたりして、それらをよく見返すように助言する。
- 3 難しい課題に直面したら、すぐに終わる課題や簡単な課題から済ませるように助言する。
- 4 自分の学習の進み具合を、客観的に振り返りながら学習を進めるように助言する。
- 5 今学んでいることと、既に知っている知識を関連付けながら学習するように助言する。
- 6 学習の途中でも学習の目標を自分に言い聞かせながら取り組むように助言する。
- 7 学習に要する時間を意識したり、学習を終わらせる目標時間を意識したりしながら取り組むように助言する。
- 8 なぜ外国語の学習をするのかということや常に自問自答しながら学習に取り組むように助言する。
- 9 外国語を学ぶことで得られる価値について、考えさせる。
- 10 学習計画や学習時間を学習者自身に管理させる。
- 11 学習中に発生する意欲の低下やストレスを調整する手立てを助言する。
- 12 自分ならできると言い聞かせて自己効力感を知覚するように助言する。
- 13 児童が飽きないように学習課題に新鮮味を出したり、興味が持てるよう工夫したりする。
- 14 やりたくなくても勉強し続けるといった努力も大切であることを助言する。
- 15 誘惑や困難に打ち勝つ強い気持ちをもつことが大切であると助言する。
- 16 教師やクラスメイトの助けを得ることで学習を遂行させることができることを助言する。
- 17 学習した外国語の表現を実際の会話で使用してみるように助言する。
- 18 学習した外国語の表現を話す機会をできるだけ多く探すように助言する。
- 19 学習を妨げるものを取り除くように助言する。
- 20 集中できる場所で学習するように助言する。
- 21 学習に飽きたら一度中断し、少し休んだ後に再開するなどの方策を助言する。
- 22 学習が遂行された後にスタンプや学習シールなどの報酬を与える。

3.2.2.4 外国語の家庭学習を通して児童が獲得する『自己調整学習サイクル』段階 (RQ4)

ここでは、山本・齋藤・近藤・石川 (2013) による、「中学生の自己調整学習能力 Can-do リスト」を参照し、最高到達レベルである「レベル5」をもとに筆者が質問文を作成した。『自己調整学習サイクル』の3段階についてそれぞれ2文ずつ作成した (表6)。

表6 外国語の家庭学習を通して児童が獲得することを指導者が期待する自己調整学習方略
(『自己調整学習サイクル』段階の観点から)

予見	1 外国語の自宅学習教材を使用すれば、将来の自分の姿を見通して、学習の目標や計画を立てることができる。
	2 外国語の自宅学習教材を使用すれば、自分のやる気をうまく引き出して学習を進めることができる。
遂行 コントロール	3 外国語の自宅学習教材を使用すれば、様々な学習方法の中から自分に最も適した方法を選択することができるようになる。
	4 外国語の自宅学習教材を使用すれば、自分のやりたい学習やその方法を模索・創造することができる。
自己省察	5 外国語の自宅学習教材を使用すれば、自分自身で自分の優れた点や弱点などを知ることができるようになる。
	6 外国語の自宅学習教材を使用すれば、自分自身の弱点の解決方法を考えることができるようになる。

3.3 方法

参加者に対して、質問紙調査実施の1週間前の授業時に筆者が質問紙調査への協力依頼を口頭および講義資料内に記載する形で行った。全15回授業の最終回の授業終了後に教室にて回答を依頼した。制限時間は設けず参加者各自のペースで回答をした。回答にあたっては、成績評価には一切関係ないこと、これからの小学校外国語教育の発展や大学での小学校外国語教育従事者の育成のために活用すること、学年や在籍クラス、個人情報等を特定したり公表したりしないこと、回答をしたくない場合や回答したくない項目への回答を拒否することができ一切の不利益を受けないこと、本アンケートの回答を以て回答に同意したものとすることについて、質問紙面内の記述と口頭により参加者に説明した。

4. 分析・結果

4.1 分析

「3.2 材料」に示した質問紙から得た回答について、次のような分析にて研究課題を検証した。まず、(1)6件法の質問文すべてにおいて信頼性検定を実施した。(2)(1)で信頼性が得られた質問項目について、反転項目には反転処理をした上でプロマックス回転による探索的因子分析を行い、因子グループを確認した。(3)(2)で得られた因子グループ間の相関の強さを相関分析にて確認した。(4)(2)で得られた因子グループ間の期待度の差を一元配置分散分析にて確認した。(5)自由記述から参加者の外国語自宅学習への意見を整理し、検証した。

4.2 結果

4.2.1 外国語における家庭学習教材を使用することに関する意見

調査参加者に、文部科学省発行の“小学校6年生用ふり返り学習教材外国語”を例として示した上で、小学校第6学年児童が外国語の家庭学習教材を使用することを想定してもらい、それに対する意見を尋ねた。多かった意見を順に挙げると、「指導者としても学習者としても活用したい」が104名中38名、「指導者としては活用したいが学習者としてはどちらともいえない」が26名、「指導者としては活用したいが学習者としては使用したいとは思わない」、「指導者としても学習者としても使用したいとは思わない」、「指導者とし

ではどちらともいえず、学習者としては使用したいとは思わない」がそれぞれ6名ずつであった。

「家庭学習は児童が自立的な外国語学習者になるために必要か」の問いについては、「必要である」が60名、「今後必要になるかもしれないが、現時点では必要ない」が48名、「必要ではない」が8名であった。「どんな家庭学習教材を使用したいか」の問いについては、「タブレットやパソコンでできる教材」が40%以上で最も多く、「自作教材」は10%程度であった。家庭学習の頻度としては「週2回」、1回あたりの学習時間は「30分」、1回あたりの学習量は「A4用紙1ページ」という意見が最も多かった。

4.2.2 外国語学習を通して児童を自己調整学習者に育てる条件

4.2.2.1 外国語学習を通じた児童の自己調整学習能力の向上 (RQ1)

28の質問文について信頼性検定を実施したところ、すべての質問文の信頼性係数 α は、.80以上であった。プロマックス回転による因子分析の結果、十分な適合度が得られたため ($\chi^2(272) = 384.16, p = .001$)、4因子が妥当と判断した。「自己肯定感につながる学習方法」(因子1)、「到達目標の意識と自己調整」(因子2)、「援助要請と学習の主体性」(因子3)、および「他律性」(因子4)と命名した。また、因子1、因子2、因子3の3因子間には中程度の相関が見られた。パターン行列と因子相関については下の表7に示す。さらに、一元配置分散分析により因子間を比較したところ、 $F(3, 309) = 82.97, p < .001, \eta^2 = .446$ で有意であり、効果量は大きかった。ボンフェローニの方法を用いて多重比較をしたところ、「援助要請と学習の主体性」が他の因子よりも.05%水準で有意に期待度が高かった。

表7 外国語学習を通じた児童の自己調整学習能力向上への期待に関するパターン行列と因子相関

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子 自己肯定感につながる学習方法 ($\alpha = .45$)					
15 児童は、外国語の学習において、どこがわかっているか、どこがわかっていないのかをはっきりさせている。	0.77	-0.05	-0.17	0.08	0.54
14 児童は、外国語の宿題を出せば、自分で計画を立てて学習する。	0.70	0.05	0.11	-0.10	0.56
21 児童は、外国語の学習で分からない時には、あきらめずに学習方法を変えてみようとする。	0.67	0.18	-0.03	-0.11	0.53
17 児童は、自分は外国語ができるほうだと思っている。	0.60	0.25	0.28	-0.23	0.52
11 児童は、外国語の宿題を出せば必ずやるようになる。	0.53	-0.29	0.26	0.10	0.36
12 児童は、外国語指導者が振り返りカードやワークシートを点検してくれれば、外国語の学習をがんばれると思っている。	0.51	0.00	-0.16	-0.00	0.41
18 児童は、自宅で外国語学習をしているかどうかを友だちとお互いに確認し合っている。	0.38	0.37	0.09	0.04	0.41
27 児童は、外国語の学習についての自分の課題点を、指導者に指摘してほしいと思っている。	0.32	0.24	-0.20	0.30	0.50
第2因子 到達目標の意識と自己調整 ($\alpha = .43$)					
9 児童は、自分に合った外国語の学習方法を工夫したり調べたりする。	0.18	0.63	-0.20	0.03	0.48
1 外国語の授業では、児童同士が学習の方法を互いに比べて、自分の学習に生かすことができる。	-0.09	0.60	0.05	-0.08	0.30
2 外国語の授業は、児童が家庭でもできる限り外国語の学習時間を作ろうとするきっかけになる。	0.00	0.53	0.07	-0.27	0.27

10 児童が一人で外国語の学習をするとき、自分の学習方法は自分に合っているかどうかを振り返ることができる。	0.32	0.53	-0.26	0.07	0.52
3 児童は、外国語の学習は将来役に立つと思っている。	-0.02	0.50	0.02	-0.21	0.21
4 児童は、努力して学習すれば外国語を習得できていると思っている。	-0.08	0.45	0.30	-0.05	0.30
7 児童は、外国語の発表やパフォーマンステストなどの練習を必ずしている。	0.04	0.45	-0.02	0.16	0.29
5 児童は、外国語の学習に関するまとめのプリントや単語の一覧表など、学習する内容を示してほしいと思っている。	-0.12	0.41	0.26	0.25	0.42
25 児童は、自分が目標にしている英語力を将来つけられると思っている。	0.10	0.31	0.24	0.06	0.28
第3因子 援助要請と学習の主体性 ($\alpha = .58$)					
22 児童は、英語がすらすら話せたらいいと思っている。	0.03	0.01	0.79	-0.08	0.59
23 児童は、いつか英語で本を読んだり映画を見たりできるようになりたいと思っている。	0.11	0.14	0.71	-0.02	0.65
20 児童は、外国語の学習で困っている時には友だちや指導者に尋ねる。	-0.03	-0.06	0.68	0.01	0.44
19 児童は、外国語の学習で困っている時には指導者に助けてほしいと思っている。	-0.08	-0.08	0.62	0.01	0.35
13 児童は、ゆくゆくは自分一人でも外国語の学習ができるようになりたいと思っている。	0.16	0.27	0.36	-0.15	0.31
第4因子 他律性 ($\alpha = .71$)					
28 児童は、宿題などで強制されないと自宅での外国語の学習はできない。	-0.25	0.34	-0.00	-0.70	0.50
16 児童は、外国語の学習は好きというより仕方がないから学習している。	0.45	-0.29	-0.03	-0.54	0.43
6 児童は、塾や保護者などの助けや強制がないと、学校以外で外国語の学習はできない。	0.20	0.16	-0.05	-0.53	0.28
8 児童が、自宅で自主的に外国語の学習をすることは大切だ。	0.20	-0.08	0.21	0.42	0.36
26 児童は、外国語の小テストや定期テストは目標になるのであった方がよいと思っている。	0.10	0.37	0.04	0.42	0.52
24 児童は、教科書で学ぶこと以上の英語の知識は必要ないと思っている。	-0.03	0.03	0.28	-0.40	0.15
因子相関行列					
第1因子 自己肯定感につながる学習方法	1.00				
第2因子 到達目標の意識と自己調整	0.55	1.00			
第3因子 援助要請と学習の主体性	0.31	0.32	1.00		
第4因子 他律性	0.28	0.36	0.39	1.00	

4.2.2.2 外国語の家庭学習を通じた児童の自己調整学習方略の獲得 (RQ2)

15の質問文について信頼性検定を実施したところ、すべての質問文の信頼性係数 α は、.80以上であった。プロマックス回転による因子分析の結果、十分な適合度が得られたため ($\chi^2(63) = 118.43, p = .001$)、3因子が妥当と判断した。「学力向上のための具体策」(因子1)、「援助要請」(因子2)、および「自律的な学習態度」(因子3)と命名した。また、3因子間には中程度の相関が見られた。パターン行列と因子相関については下の表8に示す。さらに、一元配置分散分析により因子間を比較したところ、 $F(2, 206) = 38.82, p < .001, \eta^2 = .274$

で有意であり、効果量は大きかった。ボンフェローニの方法を用いて多重比較をしたところ、「援助要請」が他の因子よりも.05%水準で有意に期待度が高かった。

表8 外国語の家庭学習を通じた児童の自己調整学習方略獲得の期待に関するパターン行列と因子相関

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子 学力向上のための具体策 ($\alpha = .56$)				
4 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習課題をよりよく遂行するための参考資料や必要な情報を探そうと努力する。	0.91	-0.25	0.01	0.65
5 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習の記録を書いたりできなかったところを一覧表に整理したりする。	0.81	-0.26	0.10	0.56
6 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は自分が学習しやすい環境を構築することができる。	0.78	0.23	-0.25	0.63
3 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は目標達成に向けて学習計画を立てることができる。	0.74	-0.06	0.60	0.56
8 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習の効果を高めるために、反復練習や学習内容を記憶するための対策などを講じることができる。	0.75	0.06	-0.12	0.51
7 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は自分の学習結果に対する報酬を設定して、それに向けて努力することができる。	0.64	0.17	-0.11	0.48
2 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は与えられた教材を工夫して使用するようになる。	0.50	0.08	0.08	0.36
1 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は主体的に学習の進度や理解度を確認するようになる。	0.47	0.10	0.17	0.42
第2因子 援助要請 ($\alpha = .72$)				
9 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習で困った時に友だちに支援を求めることができる。	0.12	0.84	-0.13	0.73
11 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習で困った時に保護者や周囲の大人に支援を求めることができる。	-0.27	0.72	0.05	0.39
10 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は学習で困った時に教師に支援を求めることができる。	0.10	0.62	-0.04	0.44
第3因子 自律的な学習態度 ($\alpha = .64$)				
12 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は復習としてテストやワークシートを見直すことができる。	0.12	0.09	0.76	0.78
13 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は復習として教科書等のテキストを見直すことができる。	0.04	0.16	0.73	0.72
14 外国語の自宅学習教材を使用すれば、児童は次の授業の準備やテスト対策（パフォーマンステスト含む）などに取り組むことができる。	0.23	0.08	0.65	0.74
15 外国語の自宅学習教材を使用しても、児童は指導者や保護者が言った通りに漠然と課題に取り組むだけである。	0.16	0.19	-0.49	0.15
因子相関行列				
第1因子 学力向上のための具体策	1.00			
第2因子 援助要請	0.57	1.00		
第3因子 自律的な学習態度	0.62	0.48	1.00	

4.2.2.3 外国語の家庭学習の遂行段階において必要な教育的介入(RQ3)

22の質問文について信頼性検定を実施したところ、すべての質問文の信頼性係数 α は、.90以上であった。プロマックス回転による因子分析の結果、十分な適合度が得られたため($\chi^2(168)=277.31, p=.001$)、3因子が妥当と判断した。「学力向上のための具体的助言」(因子1)、「学習動機と自己効力感を高める助言」(因子2)、および「学習の粘り強さと自己調整力を育てる助言」(因子3)と命名した。また、3因子間には中程度の相関が見られた。パターン行列と因子相関については下の表9に示す。一元配置分散分析により因子間を比較したところ、 $F(2, 206)=17.85, p<.001, \eta^2=.148$ で有意であり、効果量は大きかった。ボンフェローニの方法を用いて多重比較をしたところ、「学力向上のための具体的助言」と「学習の粘り強さと自己調整力を育てる助言」が「学習動機と自己効力感を高める助言」よりも.05%水準で有意に期待度が高かった。

表9 外国語の家庭学習遂行段階において指導者が必要と考える教育的介入に関するパターン行列と因子相関

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子 学力向上のための具体的助言 ($\alpha=.81$)				
1 難しい課題に直面したら、課題を一度に解決しようとするのではなく授業を思い出しながら少しずつ解決するように助言する。	0.82	-0.10	-0.05	0.56
2 難しい課題に直面したら、教科書に印をつけたり自分なりのメモをしたりしたものを、よく見返すように助言する。	0.78	0.04	-0.12	0.54
5 今学んでいることと既に知っている知識を関連付けながら学習をするように助言する。	0.77	-0.08	0.04	0.58
13 児童が飽きないように学習課題に新鮮味を出したり、興味が持てるよう工夫したりする。	0.71	0.09	-0.22	0.40
18 学習した英語の表現を話す機会をできるだけ多く探すように助言する。	0.66	0.08	0.17	0.67
17 学習した英語の表現を実際の会話で使用してみるように助言する。	0.49	0.23	0.21	0.64
16 指導者やクラスメイトの助言を得ることで学習を遂行させることができることを助言する。	0.44	-0.05	0.38	0.50
22 学習が遂行された後にスタンプや学習シールなどの報酬を与える。	0.44	-0.07	0.08	0.21
第2因子 学習動機と自己効力感を高める助言 ($\alpha=.84$)				
8 なぜ外国語の学習をするのかということを常に自問自答しながら学習に取り組むように助言する。	-0.10	1.07	-0.14	0.89
9 外国語を学ぶことで得られる価値について考えさせる。	0.05	0.83	-0.10	0.62
7 学習に要する時間を意識したり、学習を終わらせる目標時間を意識したりしながら取り組むように助言する。	-0.04	0.52	0.37	0.63
6 学習の途中でも学習の目標を自分に言い聞かせながら取り組むように助言する。	0.04	0.51	0.23	0.50
12 自分ならできると言い聞かせて自己効力感を知覚するように助言をする。	-0.03	0.41	0.37	0.48
11 学習中に発生する意欲の低下やストレスを調整する手立てを助言する。	0.15	0.40	0.12	0.34
第3因子 学習の粘り強さと自己調整力を育てる助言 ($\alpha=.79$)				
15 誘惑や困難に打ち克つ気持ちをもつことが大切であると助言する。	-0.09	-0.05	0.97	0.77
14 やりたくなくても勉強し続けるといった努力も大切であることを助言する。	-0.16	0.08	0.85	0.66
20 集中できる場所で学習するように助言する。	0.21	-0.03	0.49	0.39
21 学習に飽きたら一度中断し、少し休んだ後に再開するなどの方策を助言する。	0.14	-0.06	0.38	0.19
4 自分の学習の進み具合を、客観的に振り返りながら学習を進めるように助言する。	0.23	0.18	0.36	0.44

10 学習計画や学習時間を学習者自身に管理させる。	-0.10	0.21	0.35	0.21
19 学習を妨げるものを取り除くように助言する。	-0.04	0.28	0.32	0.28
3 難しい課題に直面したら、すぐに終わる課題や簡単な課題から済ませるように助言する。	0.20	0.09	0.28	0.25
因子相関行列				
第1因子 学力向上のための具体的助言	1.00			
第2因子 学習動機と自己効力感を高める助言	0.48	1.00		
第3因子 学習の粘り強さと自己調整力を育てる助言	0.62	0.68	1.00	

4.2.2.4 外国語の家庭学習を通して児童が獲得する『自己調整学習サイクル』段階 (RQ4)

6つの質問文について信頼性検定を実施したところ、すべての質問文の信頼性係数 α は、.80以上であった。プロマックス回転による因子分析の結果、6つの質問は1因子に収束されたため、『自己調整学習サイクル』の3段階（「予見」、「遂行コントロール」、「自己省察」）を3因子としてみなし、その後の分析へ進んだ。3因子間には中程度以上の相関が見られた。また、一元配置分散分析により因子間を比較したところ、 $F(2, 206) = 14.04, p < .001, \eta^2 = .120$ で有意であり、効果量は小さかった。ボンフェローニの方法を用いて多重比較をしたところ、「自己省察」段階が「予見」および「遂行コントロール」段階よりも.05%水準で有意に期待度が高かった。

5. 考察

5.1 外国語学習を通じた児童の自己調整学習能力の向上 (RQ1) について

外国語の授業全般を通して、児童が自己調整学習能力を向上させることができるのかについて、指導者は「自己肯定感につながる学習方法」、「到達目標の意識と自己調整」、および「援助要請と学習の主体性」に関する自己調整学習能力の向上を期待し、一方で児童は「他律性」も持ち合わせていると考えていることが明らかになった。自己調整学習とは、メタ認知、動機づけ、行動において、自らの学習過程に能動的に関与して進められる学習 (Zimmerman, 1989) とされている。結果より、小学校外国語という教科を通して児童を外国語学習に能動的に関与させるための視点を示すことができた。山本ら (2013) は、小中学生という初期学習者にも自己調整学習の必要性が理解でき、自己調整学習能力向上に向けて努力できると述べている。外国語の指導者が「自己肯定感につながる学習方法」、「到達目標の意識と自己調整」、「援助要請と学習の主体性」を意識した学習指導、授業展開、教材等を継続して取り入れることで、児童にもこれらの指導観が伝わり、児童の自己調整学習能力の向上につながることを期待できる。

5.2 外国語の家庭学習を通じた児童の自己調整学習方略の獲得 (RQ2) について

外国語の家庭学習を実施することを想定し、それにより児童の自己調整学習方略が獲得されるのかについて、指導者は「学力向上のための具体策」、「援助要請」、および「自律的な学習態度」に関する自己調整学習方略の獲得を期待し、その中でも「援助要請」への期待が大きいことが明らかになった。「5.1の外国語の授業全般を通じた自己調整学習能力の向上」で期待された「援助要請と学習の主体性」とも類似する結果であるが、外国語の家庭学習に焦点を当てた質問であったことが反映されたと考えられる。外国語の授業は、外国語による言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することがねらいとなっており、聞くこと、話すことを中心とした活動的な学びに比重が置かれている。対話を中心とするペア活動の時間が確保されるものの、指導者が一斉に指示をしてクラス全体で活動をする展開が多い。児童は、

学習に疑問や困難を感じた場合に、指導者や友だちに支援を求める機会を得ることが難しい状況であると予想される。教科化以前の外国語活動では、習得させることを強くは求めず、外国語に「慣れ親しむこと」を目標とする学習活動であったこともあり、疑問や理解が困難なことがあっても学習を進めることが積み重ねられてきたことも一因であろう。外国語の家庭学習を実際に導入するには、教材や授業との連携等、課題は多くあるが、家庭学習という指導者がいない中での学習機会を体験させることにより、児童が学習に疑問や困難を感じた場合に学校で指導者や友だちに自ら支援を求めるという行動を促すことが期待できる。

5.3 外国語の家庭学習の遂行段階において必要な教育的介入(RQ3)について

外国語の家庭学習を実施することを想定し、その遂行段階において必要な教育的介入について、指導者は「学力向上のための具体的助言」、「学習動機と自己効力感を高める助言」、および「学習の粘り強さと自己調整力を育てる助言」が必要であると考えおり、「学力向上のための具体的助言」と「学習の粘り強さと自己調整力を育てる助言」はともに必要感が高いことが明らかになった。文部科学省発行の“小学校6年生用ふり返し学習教材外国語”を例として家庭学習教材の使用の意見を尋ねた結果、「指導者として使用したい」という参加者は約7割いた。学習者の立場では使用したいとは思わないという意見が多かったものの、やはり指導者としては外国語を習得する上で家庭学習は必要であり、授業中や学校生活の中で指導者が実践しているであろう「学力向上のための具体的助言」と「学習の粘り強さと自己調整力を育てる助言」に関して、児童に家庭学習を遂行させる場合にも必要だと考えていることが分かる。授業に加え、外国語教育の研究指定を受けるなどの特例を除き、これまで全国的にはほとんど実施されていない外国語の家庭学習を導入することは、教材の準備や児童への指導等が加わることになり、指導者の負担が増えることになる。それにもかかわらず、家庭学習に関しても具体的な助言をしたり粘り強く学習に取り組むための助言をしたりしようという指導者としての使命感が読み取れた。本研究は、小学校教員を志願する学生80名を含む小学校教員養成課程の学生104名を対象としたものであったが、現職の外国語教育指導者の意見に近いものであると捉えた場合、外国語においても家庭学習やそれに伴う指導と家庭学習の導入により期待できる効果に関して多くの指導者が肯定的に捉えていることが明らかになったと言える。

5.4 外国語の家庭学習を通して児童が獲得する『自己調整学習サイクル』段階(RQ4)について

Zimmerman(1989)による『自己調整学習サイクル』3段階である「予見」、「遂行コントロール」、「自己省察」について、「自己省察」段階における学習方略獲得への期待が高いことが特徴といえる。調査紙における「自己省察」に関する具体的質問は、「外国語家庭学習教材を使用すれば、自分自身で自分の優れた点や弱点などを知ることができるようになる。」、「外国語家庭学習教材を使用すれば、自分自身の弱点の解決方法を考えることができるようになる。」であった。学習の振り返りや自己評価については、小学校に外国語活動が導入されたころから広く授業内で実践されてきたものの、主に情意面での振り返りや学習の理解度を大まかに振り返る内容が多く見られた。授業内でも、自分の優れた点や弱点、弱点の解決方法に児童自身が想いを巡らすことはあるだろう。実際のところは、それらに対処する時間がないまま、あるいは対処法を知りたいが知る機会もなく次の授業に臨むということを繰り返すことが懸念される。もちろん、指導者も児童も、授業に全力を尽くすことで外国語の学びを充実させることはできるだろう。指導者や児童が時間的に心理的にも負担なく取り組むことができる家庭学習があれば、児童が自ら抱く学びの理解度へ客観的視点やもっとできるようになりたいという学習意欲をこれまで以上に鋭くすくい上げる機会になるのではないだろうか。多くの指導者が「自己省察」段階に期待していることから、授業で学習したことを自宅で気軽に確認してみる、自宅で学習したが理解できなかったことを学校で先生や友だちに相談してみる、というところから、「宿題」や「課題」というよりも、「自己評価」や「振り返り」という感覚から外国語家庭学習を取り扱っていくことを提案したい。

6. まとめと今後の課題

本研究は、児童が主体的、自律的に外国語学習に取り組むことができ、学習習慣が確立されること的手段として外国語の家庭学習を取り上げ、指導者の意見に焦点を当てて調査をした。具体的には、(1) 外国語の授業と連携した家庭学習は児童の自己調整学習方略の獲得が期待できるか、(2) 家庭学習を遂行するにはどんな教育的介入が必要か、について指導者側の視点から明らかにした。外国語の家庭学習では「援助要請」の方略の獲得への期待、外国語の家庭学習の遂行においては「学力向上のための具体的助言」と「学習の粘り強さと自己調整力を育てる助言」が必要であるとの指導者の意見が明らかになり、自律した外国語学習者を育成する上で指導者が抱く指導観や教育的介入の方法が可視化された。本研究に続く外国語の家庭学習教材作成に向けて、自己調整学習者を育てるという観点からの条件をつかむことができた。今後は学習者である児童の意見を聞き、学習者自身が学習を調整することを促すような家庭学習教材の具体的内容を明らかにした上で実証研究を進めていく。

自己調整学習ができる力を育てることは、変化の激しい時代をよりよく生きる上での基盤を固めることであるともいえるが、簡単なことではなく時間を要するものである。また、児童の内面や家庭環境等にも関わるものであり、個別の指導や支援を要するものである。だからこそ自己調整学習ができる態度や方略を養う取り組みは小学校段階から進めていくべきだと考える。外国語が教科となった高学年では、学習内容の習得を目指すことに注力するだけでなく、理解度を「自己省察」によって客観的に捉えたり、学習に対する不安要素を自ら克服するための「援助要請」方略を駆使したりするための指導も可能である。「自己省察」ができる家庭学習教材を準備し、授業と同様に家庭学習における児童の学習困難に対する支援体制を整え、授業と連携した家庭学習を実現させることは、自律した外国語学習者の育成のための鍵になると言える。

引用文献・参考文献

- 阿久津真梨子，“小学生の宿題と家族負担に関する研究”，『教育福祉研究』，第22号，2017，pp.63-72
- Bempechat, J., “The motivational benefits of homework : A social cognitive perspective”, *Theory in Practice*, vol.43, 2004, pp.189-196
- Cooper, H., “Synthesis of research on homework”, *Educational Leadership*, vol.47, 1989, pp.85-91
- 稲垣忠・佐藤靖泰，“家庭における視聴ログとノート作成に着目した反転授業の分析”，『日本教育工学会論文誌』，第39巻，第2号，2015，pp.97-105
- 牧野眞貴，“英語リメディアル教育における自己調整学習の試み”，『リメディアル教育研究』，第9巻，第2号，2014，pp.88-94
- 文部科学省，“「英語が使える日本人」育成のための行動計画について”，入手先〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryu/_icsFiles/afieldfile/2011/01/31/1300465_02.pdf〉，（参照 2022-04-27）
- 文部科学省，『小学校学習指導要領（平成29年告示）』，東洋館出版社，2017，p.17
- 文部科学省，“小学校教員養成課程外国語（英語）コアカリキュラム案”，入手先〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryu/attach/1388110.htm〉，（参照 2022-04-27）
- 文部科学省，“小学校6年生用 振り返り教材〈外国語（英語）〉”，入手先〈https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503_00003.htm〉，（参照 2022-05-06）
- 文部科学省，“学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料”，入手先〈https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext_01491.html〉（参照 2022-10-31）
- 野口芳弘，『授業で鍛える』，明治図書，1986，p.36

- 佐藤靖泰・高松歩未・稲垣忠, “小学校算数科における反転学習の導入による授業展開の変容”, 『教育メディア学会研究会論集』, 第36号, 2014, pp.27-32
- 山本玲子・齋藤榮二・石川保茂, “学習者の自己調整学習能力と教師の指導助言の関係”, 『国際研究論叢』, 第27巻, 第1号, 2013, pp.73-84
- 山本玲子・齋藤榮二・近藤睦美・石川保茂, “小学校外国語活動と中学校英語科教育の連携による自己調整学習能力の実証的研究”, 『京都外国語大学国際言語平和研究所研究論叢』, 第81号, 2013, pp.69-80
- 山下順子 “自己調整学習における調整方略の特徴とその効果”, 『中国四国教育学会教育学研究ジャーナル』 第25号, 2020, pp.75-83
- 米崎里・伊東治巳, “フィンランドの小学校の英語教科書分析 – Autonomy の視点から –”, 『小学校英語教育学会紀要』, 第10巻, 2010, pp.37-42
- Zimmerman, B. J., “A social Cognitive View of Self-Regulated Academic Learning”, *Journal of Educational Psychology*, vol.81, No.3, pp.329-339